

令和 2 年 6 月 14 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02379

研究課題名(和文) フランス写実主義小説の成立に関する実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study on the Formation of the French Realist Novel

研究代表者

田口 紀子 (Taguchi, Noriko)

京都大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：60201604

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は19世紀フランス文学において3人称リアリズム小説が成立した経緯を、作品内に演劇的構造を措定することにより解明したものである。語られる事件は「舞台」上で繰り広げられ、それを「語り手」と「聞き手」が観客として鑑賞する構造をとることで、3人称の「語り手」のみが持つ全知・遍在性が可能となる。この「語り手(=作者)」と「聞き手(=読者)」は同時代のパリ市民の属性を備えている。リアリズム小説で目指されているのは客観的な社会描写ではなく、彼らの視点から見た「リアル」な社会なのである。「リアリズム」とは同時代の観察者の主観に媒介されたものとしてはじめて可能となったことを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

19世紀前半、大革命とナポレオン戦争を乗り越えて新たに社会の担い手となった新興ブルジョワジー達は、自らの社会を忠実に映し出す「鏡」を必要とした。新しい「歴史」として散文で記録される物語は、文学の伝統的ジャンルである演劇から舞台上演の構造を借りた。そこでは描かれる事件を舞台上で上演される演目、作者はそれを演出・監督する「語り手」として、「聞き手(=読者)」に進行する事件を解説し、同時代の読者と物語世界をつなぐ役割をになう。リアリズム小説は、作家と読者の物語をめぐる「共犯関係」を前提として成立したことを、19世紀フランス文学に関して明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study clarifies the history of the formation of the third person realism novel in 19th century French literature by placing theatrical structure in the novel. The case to be told is unfolded on the "stage", and by adopting a structure in which the "narrator" and the "listener" appreciate it as an audience, making it possible for the third person "narrator" to have the omniscience and omnipresence. The "narrator (= author)" and "listener (= reader)" have the attributes of Parisians of the same period. It is not the objective description of society that is aimed at in the realism novel, but the "real" society from their point of view. "Realism" was made possible by being mediated by the subjectivity of contemporary observers.

研究分野：フランス語学フランス文学

キーワード：リアリズム フランス小説史 歴史叙述

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) ロマン主義との断絶?

フランス文学で小説が正当な文学ジャンルとして認められるのは、スタンダールとバルザックが三人称語り的小説作品を発表し始めた 1830 年代以降であり、それらの作品は文学史においては「写実主義小説(リアリズム小説)」と分類される。「写実」とは、当時の市民社会を忠実に描き出そうとしているという意味で通常用いられ、文学史的解説では大革命後に社会の中心勢力となった新興ブルジョワジーとの近親性が指摘されることが多い。すなわち、リアリズムというジャンルには革命の記憶を色濃く反映した「ロマン主義」との対立、あるいは断絶が前提とされている、という解釈である。しかし、スタンダール自身その批評「ラシーヌとシェークスピア」(1823,1825)でフランス古典演劇に対してロマン主義演劇運動を称揚するなど、ロマン主義運動の一翼を担った作家であり、バルザックも『フクロウ党』(1829)で革命期の地方の反革命勢力を題材にするなど、国民史として歴史をとらえるロマン主義史観の影響を受けていた。

このように、リアリズム小説はむしろロマン主義運動と強い紐帯で結ばれていたと考えられるが、両者の関係を作品のテクストレベルで検討した研究はほとんどないといっても良い。

(2) 他ジャンルとの影響関係

他方、文学史研究においては通常あるジャンルの自律的変遷が考察され、他のジャンル(小説に対して演劇、詩など)との相互影響関係は付随的に言及されるのみである。しかし、フランス 19 世紀初頭のロマン主義が演劇、詩、歴史叙述など複数のジャンルを巻き込んだ文芸運動であったことは、この時代の文学史がジャンル別には十分に論じられないことを示している。

例えば、1820 年代にフランスを席卷した「歴史小説」は、それ以前の前ロマン主義小説作品(コンスタン『アドルフ』(1816)、シャトーブリアン『ルネ』(1802)、セナンクール『オーベルマン』(1804)など)が一人称語りであったのに対して三人称の語りを採用している点で、リアリズム小説を準備したと考えられるが、シェニエ、ノディエといったそのブームの中心的作家達がロマン主義演劇の劇作家であったことは重要である。また、ロマン主義史観の中心概念である「民衆」「集団の対立」「時代・地方色」などがそのまま、歴史小説に流れ込んでいることは、ロマン主義運動がリアリズム小説を準備したことを示唆していると思われる。しかしながら、この時代の他ジャンルとの相互関係を踏まえたリアリズム小説というジャンル生成の研究は、私見の限りこれまで本格的には行われていない。

2. 研究の目的

これまでの文学史研究において、しばしば対立するもの、あるいは対立とまでは言えずとも別個のものとして論じられてきた演劇運動と小説形態、ロマン主義と写実主義、歴史叙述とフィクションが、相互に交差し、影響し合う領域として、フランス写実主義小説をとらえ、その成立過程を明らかにすることが本研究の目的である。

しばしば「同時代史」と形容されるフランス 19 世紀リアリズム小説が、ロマン主義演劇の歴史解釈とドラマツルギーから何を受け継いでいるか、歴史小説が問うた国民史としての自国の過去が、どのように同時代社会の描写に持ち込まれているのかを、三人称という小説の語りの形態を鍵として検討する。最終的には、この時代の小説がどのようにして、三人称語り避けることができないフィクション性を乗り越えてリアリズムを標榜できたのかを、「語り手」の造形の問題を通して明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

(1) 演劇的形式と小説：歴史情景

ロマン主義演劇の手法やテーマが歴史小説に継承されたことを踏まえ、演劇的形式がリアリズム小説にどのように受け継がれているのかを検証する。リアリズム小説と演劇をつなぐジャンルと考えられる「歴史情景」(歴史的事件を主題としてシナリオ形式をとるが、その登場人物の多さや作品の長さから、実際の上演を前提としていないことが明らかな作品。ヴィテの『ラ・リーグ』(1826-29)、メリメの『ジャックリー』(1828)など)を分析することで、演劇とリアリズム小説をつなぐ補助線とする。

(2) 歴史小説の現在時：過去を語る理由

歴史小説はフランスの歴史的事件に取材しつつ、時にそこに架空の人物を配しながら、複数の勢力の対立に巻き込まれる個人の人間のドラマとして歴史を描こうとする。リアリズム小説が同時代史としての側面を持っていることを踏まえ、後に『レ・ミゼラブル』(1862)という同時代大河小説を世に問うことになるヴィクトル・ユゴーの『パリのノートルダム』(1831)を取りあげ、作品出版当時の「現在」が、作品中で描かれる過去の事件とどのようなつながりを持ち、事件の語りにはいかなる正当性を与えているのかを分析する。この作品は中世のパリを舞台とし、当時のパリに残された歴史的建造物にその名残を検証する歴史的パリ案内の要素を多く含んでいる。過去の事件と現在時のパリがどのように結びつけられているのかを、作中に登場する語り手「私」の語りの行為に注目しつつ検討する。

(3) バルザックのリアリズム：演劇的構造

『人間喜劇』を後に構成することになる、1830 年前後に発表された初期作品をとりあげ、そこに前提とされる大革命やナポレオン戦争の記憶が残る現在と、作品中に繰り上げられる事件との因果関係を分析する。『パリのノートルダム』が過去の時間の痕跡を現在のパリに捜そうとするのとは反対に、バルザックは「現在」の有り様の原因を歴史的事件に求めようとしたのではないかと考えている。その因果関係を解説するバルザックの「語り手」のフィギュールを解析し、同時に「聞き手」である読者に付与されている属性を見ることで、彼らの共有する「現在」と「過去」がどのように語られ得たのかを考察する。

(4) スタンダールのリアリズム：不統一な語り

『赤と黒』(1830)『パルムの僧院』(1839)を取り上げ、スタンダールの「語り手」のあり方を解析する。スタンダールの「語り手」が、バルザックよりも頻繁に物語に介入して登場人物の心理や正確を解説したり、社会批判を繰り上げたりすることはつとに指摘されるが、その一方で「視野の制限」と呼ばれる小説世界の人物の主観を通じた叙述や、人物達の内的独白の多用といった、「語り手」を介さない叙述も特徴的である。この一見不統一な語りスタンダール独自のリアリズムの表象とどのように関係するのかを検討する。

4. 研究成果

(1) 演劇的形式と小説：歴史情景

まずロマン主義演劇の代表作であるユゴーの『クロムウェル』(1827)と『エルナニ』(1830)を分析し、集団の対立による歴史的事件を複数の場所で展開される複数のプロットの同時進行という形をとっていることが、古典演劇の規範である三一致の法則のうち、場所と時間の一致の逸脱へと向かわせていることを確認した。

過去の経緯が招いた極度の緊張状態が一つの出来事をきっかけに急激、かつ不可避的に破局へと進行する古典主義の作劇法とは違い、ロマン主義歴史劇では演じられるペリペシーの積み重ねが歴史的事件の経過そのものとして表象される。その結果、描かれる歴史は回顧的視点による合目的なものではなく、不可知の未来に向かってすすまざるを得ない、生身の人間が持つ前望の様相を呈することとなる。

ロマン主義演劇とほぼ同時期に、上演を目指さない演劇として限りなく小説に接近したジャンル「歴史的情景」に注目し、その代表作であるヴィテの『ラ・リーグ』と『クロムウェル』との作劇上の比較を行った。対立する勢力を場面ごとに交互に描いてゆく手法は共通であり、また偶発的事件の結果として史実を前望的に描き出そうとする点も同様である。この歴史表象は、進行中の事件を不確かな未来に向かって描写する「写実主義小説」に道を開くものと考えられる。

(2) 歴史小説の現在時：過去を語る理由

歴史小説の代表作の一つであるユゴーの『パリのノートルダム』を取り上げ、そこで描かれる過去の歴史が作家や読者が生きる現在とどのような関連性を与えられているのかを分析した。

まず、「今をさかのぼること 348 年 6 月 19 日前」という現在時からの回顧で始まるこの作品は、歴史小説でありながら、現在のパリとその住人である「語り手」「読者」の視点から構成される。「現在」を読み解くための過去の検証の物語という形態をとっている。そのために語られる事件は「現在」に再現される演劇的シーンとしてえがかれる。特に第 1 編は劇作家であるグランゴワールを視点人物として、他の登場人物や事件が彼の目に映るものとして導入される。同時に「語り手」が「読者」にテキスト中で呼びかけることによって、読者自身もその「観客」として物語世界に組み入れられる、言語行為的紋中紋の構造を持っている。

また、頻繁に差し挟まれるパリの建造物についての歴史的概説はこの作品の大きな特徴であるが、単純過去を用いた<histoire>のいわゆる歴史叙述ではなく、現在形、半過去、読者である「あなた」への呼びかけなどを含む<discours>で語られる。その意味で、これらの歴史的記述は、ユゴーが生きた時代のパリとその現在を解き明かすための過去への言及である。従ってここでも、語りの現在時を基軸とした物語の演劇的提示は維持されており、読者は事件の証人としての機能を担わされることになる。呼び起こされた過去は「語り手」と「読者」に彼らの生きる現在の厚みを体験させるのである。

(3) バルザックのリアリズム：演劇的構造

本研究の対象であるフランス・リアリズム小説の嚆矢であるバルザックが 1829-1830 年に発表した短編作品、『ソーの舞踏会』『栄光と不幸』『ラ・ヴァンデッタ』『財布』を分析した。これらの作品はいずれも作者のほぼ同時代のパリを舞台としながら、『フクロウ党』の流れをくみ、フランス革命期の記憶が色濃く反映している。『ソーの舞踏会』は王政復古期の貴族の娘と新興ブルジョワジーの青年の恋愛と挫折を軸に、新旧二つの勢力のせめぎ合いと、不可逆的に変化してゆくフランスの上流社会が活写されている。直接話法による場面の演劇的再現とともに、現在形での一般論や読者との共通了解事項としての固有名詞の頻出、「我々」という形での読者への目くばせなどから、物語時空間と作者・読者の「現在」の連続性が前提とされていることが、分析の結果明らかとなった。同様の特徴は他の作品にも観察される。さらにこれら 4 作品ともが、登

場人物の直接話法のせりふで結ばれている点は、作品の演劇性を強調している。

この時期のバルザックのリアリズムとは、物語を同時代の出来事として客観的に叙述するものではなく、歴史的状況を背景に、同時代の物語を演劇的に表象し、語り手と読者はその観客・証人として作品内に位置づけられていることが確認された。

(4) スタンダールのリアリズム：不統一な語り

最終年度はバルザックとならびリアリズム小説の開拓者とされながらも、不統一な三人称の語りとロマン主義的傾向のために、その位置づけが難しいスタンダールの作品を、代表作『パルムの僧院』を中心に分析した。

スタンダール作品での語り手「私」は、おおむねバルザックの三人称作品の語り手と同様、同時代のフランス人読者に語りかける知識人というフィギュールをとっている。ここまでの研究で得られた仮説〈物語の演劇的構造と観察者としての「語り手」と「読者」〉の観点から言えば、「語り手」は物語時間を共有しながらも、再現される事件を外から観察する存在である。しかしスタンダールの『パルムの僧院』は、冒頭部分でこそナポレオン軍のイタリア駐留、ファブリスの誕生と成長、彼のワテルローの戦いへの参戦までが外的焦点化によって外から描かれるものの、ワテルローでは戦争の悲惨な現実がファブリスの視点で描写される「視野の制限」の手法が採用されることで、これ以降の登場人物の内面描写が準備される。内面描写の種類としては「内的焦点化」「自由間接話法」「内的独白」(自由直接話法)などが主なものであり、いずれも各登場人物の主要場面で用いられる。これ以降埒外の語り手による解釈と登場人物の主観を通したシーンが混在するのだが、これらの一人称的叙述は、演劇的構造のバリエーションと考えられるのではないか。

例えば「内的独白」は舞台の「長台詞」との類似を指摘することが可能で、人物が「語り手」からの自律性を獲得したと解釈することができる。また「語り手」のディスクールを基盤とする自由間接話法よりも、スタンダールにおいては人物の内心の直接話法による再現が特徴的であることも、作品の演劇性を裏付けていると言える。

そしてこのような一見統一性に欠けるスタンダールの語りの手法は、スタンダールが目指した「街道に沿って持ち歩く鏡」としてのリアリズム小説と矛盾するものではない。スタンダールの人物達は銘々が「語り手」同様自分の声を持ち、「語り手」は彼らの声を聞くことで物語を映し出す。その時「語り手」は特権的な立ち位置を放棄し、人物達と同様の資格で物語を体験するのである。このことは、鏡を持ち歩く「語り手」自身がフィクション化され、一人称語りだけに限りなく近づくことを意味している。作品冒頭で、登場人物「ロベール大尉」が「私」の友人として導入されていることは、作者の語りの不注意ではなく、「語り手」とともに作者自身が半ば登場人物として意識されていたことの査証であろう。

以上の分析によって、フランス 19 世紀中葉のリアリズム小説が、ロマン主義の中心的課題である歴史の表象と、演劇的構造を受け継ぐことで、同時代社会の現実をリアルに描くための新しい語り的手法を獲得したことが明らかになった。この「語り手」を媒介する演劇的構造は、「語り手」と「読者」の共有空間をいわば客席として作品世界に組み込むが、この事によって実際の作者と読者を含んだ彼らの現実社会をもフィクション化するプロセスが始動されたとも考えられる。バルザックに続くフロベールの「語り」の中和化・無化やモーパッサンの一人称への回帰などについても、語る主体の虚構化として再検討する可能性があるのではないかと、いう見通しを得ることができた点も大きな成果と言えるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田口紀子	4. 巻 58
2. 論文標題 フランス・リアリズム小説の演劇的構造について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都大学文学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 143-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田口紀子	4. 巻 56
2. 論文標題 フランス・ロマン主義演劇と歴史叙述	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 京都大学文学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 85 - 112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Noriko TAGUCHI	4. 巻 1
2. 論文標題 De la contingence historique a la necessite romanesque : Le cas des romans historiques francais des annees 1820	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Comment la fiction fait histoire	6. 最初と最後の頁 125-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田口紀子
2. 発表標題 「19世紀文学における田舎の表象」コメント
3. 学会等名 シンポジウム「19世紀文学における田舎の表象」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田口紀子
2. 発表標題 ヨーロッパ文学とリアリズム
3. 学会等名 リアリズム研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Noriko TAGUCHI (ed)	4. 発行年 2015年
2. 出版社 Honore Champion, Paris, France	5. 総ページ数 353
3. 書名 Comment la fiction fait histoire - Emprunts, echanges, croisements	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----